

|             |                           |
|-------------|---------------------------|
| 氏 名         | 丸 田 博 之                   |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 (文 学)                 |
| 学 位 記 番 号   | 文 博 第 135 号               |
| 学位授与の日付     | 平 成 11 年 3 月 23 日         |
| 学位授与の要件     | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当   |
| 研 究 科 ・ 専 攻 | 文 学 研 究 科 国 語 学 国 文 学 専 攻 |
| 学 位 論 文 題 目 | 中世キリシタン資料の成立に関する一試論       |

(主査)

論文調査委員 教授 木田章義 教授 日野龍夫 助教授 大谷雅夫

### 論 文 内 容 の 要 旨

本稿が考察対象とする資料は、主として1603年刊(補遺1604年刊)『日葡辞書』と1604～8年刊『日本大文典』である。1549年にフランシスコ・ザビエルが来日して以来、特にイエズス会を中心として、カトリックの布教活動は展開されてきたわけであるが、その際彼ら宣教師にとって最も重要で、最も労力を費やしたのが日本語修得であった。日本語学習のための文法書や辞書は早い時期から作製され、当初はそれらが写本によって伝えられていたが、1590年にヴァリニャーノによって西洋式印刷機がもたらされてからは、所謂「キリシタン版」が数多く上梓され、コレヂオやセミナリオの充実とも相俟って、外国人宣教師のみならず日本人信徒への教育にも利用されるに至った。そうした中であって『日葡辞書』と『日本大文典』とはキリシタン版の集大成とも言えるもので、質・量ともに他書の追随を許さない。両書が国内資料や他の外国資料に対して、より貴重な価値を有すると判断されるのは、ラテン語をはじめとするロマンス諸語の文法学の知識を土台にして、日本語が丁寧に観察されているため、日本人の分析では表れて来ない説明や現象が体系的に記述されていることによる。ただ、キリシタン資料は教科書などに特有の規範が強く存在していたとも言われている。

本稿での試みは、こうしたキリシタン資料の持つ「規範性」の問題を中心に据えながらも、『日葡辞書』と『日本大文典』に記されている文言や用例の素性を明らかにし、その成立事情の一端を明らかにすることで、両書に新しい価値を見出そうとする所にある。

〈第一章〉『耶蘇会版倭漢朗詠集』には、「義経申状」が採られているが、その中の「起請文」の部分がすべて削除されている。これは、日本の宗教的色彩の強い「起請文」を認めないとするイエズス会の方針に則ったものである。ところが、『日本大文典』には、『御成敗式目』などから「起請文」が二つ引用されている。これはイエズス会の方針に抵触しているのみならず、イエズス会の宗教上の検閲が形骸化していることを示すものとして注目される。また『日本大文典』の『論語』や『御成敗式目』の引用をみると、共に博士家である清原家の訓法と一致する。清原枝賢がキリシタンに改宗していることを考慮すると、清家もしくは清家に関わる人物が同書の成立に関与している可能性は十分に考えられ、ロドリゲスが、「都の公家の言葉」を採用すると述べていることと符合することになる。ところが、『御成敗式目』の例文の内、起請文のみは清家系の本文ではない。これは、起請文の訓読を禁じる清家の家訓が遵守されているためであるらしく、恐らく『大文典』の編者が清家系式目の起請文(白文)を適宜訓んだものであろう。そうなれば、それはロドリゲスが訓んだものではなく、『日本大文典』の編纂を助けた日本人が訓んだ可能性が高い。それが「清家に関わる人物」であるか否かは断言出来ないが、ロドリゲス一人の学識によって編まれたとされてきた『日本大文典』に、日本人が関与していた可能性が出てくるのである。

〈第二章〉『日葡辞書』の「補遺」には、その使用範囲が「上(カミ)だけ」と限定されている語が三語ある。そのうちの一つ、タイタウゴメは、「タイトウゴメ。すなわち「唐法師」。赤い米。「上(カミ)」だけのことばである。」として、標準語ではないような説明がなされている。けれども他の文献から、このタイタウゴメを始め、残りのニレンノクギ、マゼも、当代の標準語であることはほぼ確実である。従って「上だけ」の方言注記は、客観的な記述というより語注の担当者の体験

に基づいた主観的なものである可能性が高い。また同時に、「上だけ」と注するには、「下の語」に相当精通していることが不可欠であり、そうならば方言注記を施した人物は外国人宣教師ではなく、九州出身者を当てるのが妥当であろう。イエズス会内に九州出身者が多数を占めることは自然のことであるが、彼らは、外国人宣教師に必要である規範的「上の語」についての知識が十分でないため、会としては「古本節用集」及びそれらの書物の提供者から「上の語」についての必要な知識を得ることになる。例えば『日葡辞書』「所帯」の条項に引かれている説明文は、清家の『二冊本平仮名式目抄』の説明文と重要な点で合致しているし、また同書「簾中」の条項に於ける説明文は、「古本節用集」の内容に拘束されたもので、日常的に使われている意味が欠落している。したがって、『日葡辞書』（特に「本篇」）には、編者に「上」の者が加わっていないことによる不十分な「上の語」の知識や、書物への依存から生じる綻びが存在し、同書に対して、首尾一貫した京都語への「規範性」を期待することには躊躇せざるを得ないことになる。

〈第三章〉『日葡辞書』には「脈」に関する語彙が見出し語に掲載されているが、その綴り字は特に「補遺」に於いて一様ではない。中でも「miyacu」の綴り字は、一般的なキリシタンの表記「miacu」ではなく、むしろ日本の仮名遣と同じものであると言える（但し、この条項の担当者は発音を示す綴り字としては「miacu」を認めている）。これと同様のことは、『日本大文典』の「都」の綴り字についても見る事が出来、同書では巻が進むにつれて「miaco」から「miyaco」へと移行していることが窺える。これも、ポルトガル語の発音から導き出された「miaco」の綴り字を止めて、日本の仮名表記に則った「miyaco」を採用したことを意味しているのである。ところで注意されるのは、『大文典』の編集方針をロドリゲス自身が述べた文章の中では「miaco」の綴り字が使用されており、同書の綴り字の項で述べられている内容（miyaの綴り字のみを採用する）と矛盾している点である。このことから、『大文典』には具体的な記述にもロドリゲス以外の日本人が関与しており、同書がその巻が進むにつれて徐々に独自の特色を出していくのは、そのまま日本人の関与の度合いに比例するのではないかと考えられるのである。また、「miyacu」の綴り字が『日葡辞書』「補遺」に於いて初めて採られているのは、『大文典』の執筆者が同書「補遺」に関与していることを示唆するものでもあろう。『日葡辞書』と『日本大文典』とが別の人物によって編まれたことは通説となっているけれども、「補遺」に限るならば『大文典』の編者が『日葡辞書』にも関与していた可能性は高いものとせねばならないのである。

〈第四章〉『日葡辞書』「本編」には「脈」を中心とした医学用語が掲載されている。当代の典拠である曲直瀬道三がキリスト教に入信したことはフロイスの著作によって明らかであり、道三が医学上の知識をイエズス会に提供したことは想像に難くない。ただその足跡を『日葡辞書』に求めるとなると、決定的な証拠と言えるものは案外見出しがたい。本稿では、道三が「脈診」の用語として「尺中」という言葉を用いること、「脈」に関する重要な概念として「十二経」とともに「十五絡」を重用することが、道三流が他流と異なっていた点として注目し、この二点について道三流と『日葡辞書』「正編」と一致することから、曲直瀬道三またはその門下の者の関与の可能性を指摘した。ただし、同書「正編」の中には当代の節用集類から抽出された医学用語も含まれており、しかもそれらが道三以前の医学に於いて重用されていたものであることから、「正編」には道三以前と以後の両方の医学用語が併存していることを明らかにした。また「補遺」に於いては、馬医の「脈」に関する用語が二つ採られており、それらの綴り字が「～miyacu」「～miacu」のように異なっている。各々の出自を調査した結果、前者は中世の段階では仲国流の伝書にのみ見られる用語であることが明らかになった。第三章で述べた「miya」の綴り字が、『日本大文典』に関与した日本人と密接な関係にあるということを支持する傍証ともなる現象である。

## 論文審査の結果の要旨

1549年、フランシスコ・ザビエルが来日して以来、精力的に宣教活動を行ってきたイエズス会は、多くの辞書・教科書・文法書などを出版してきた。それはヨーロッパ人の目からみた日本語・日本文化という点で、貴重な資料となり、これまでも多くの分野で利用され、研究も進められて来た。これらの資料には日本人が関与していただろうと、これまでも言われてきていたが、具体的な考察については、ほとんど分析されてこなかった。

本論文は、『日本大文典』『日葡辞書』の中の、これまで注目されなかった記事の分析から、キリシタン資料の成立の過程で、日本人がどのように、どれくらい関与していたかを探るごとを主題とし、その主題に関わる周辺の現象も含めて論じたものである。

キリシタンにとって、日本の神々に誓約するという起請文は最も嫌った類の文献であり、当然『日葡辞書』では利用されていなかった。ところがロドリゲスの著した『日本大文典』には起請文が二例引用されていることから、『日本大文典』の編纂方針とイエズス会の方針とに齟齬があることを指摘し、『日本大文典』に引用された『御成敗式目』の本文の特徴が、清原家の式目本にほぼ一致している事実を基として、かなりの身分の高い公家、清原家に関わる日本人の『日本大文典』への関与の可能性を論じた。『日本大文典』所引の式目が清家本に近いという指摘は重要で、『日本大文典』の編纂過程を明らかにしてゆくための大きな手掛かりとなる。

続いて『日葡辞書』の記述の中から、「上に限る」という注記のあるものに着目し、『日葡辞書』での標準語と方言の選択の基準を明らかにし、編纂に際して、かなり上流階級の日本人の関与と、九州方言に詳しい日本人の関与の可能性を論じている。この問題は従来から論じられて来たものであるが、「太唐米」「簾中」「二連の釘」というようなこれまで注目されなかった意外な例から論じるのは新鮮であり、それに関連して調査している当時の世俗の生活などは、興味深く、深い考察となっている。

『日葡辞書』には本編と補遺編とがあるが、これまではあまりこの二編の相互関係は論じられなかった。氏は二章を割いて、この両者の関係を究明した。補遺編については、補遺編の中の矛盾した記述と綴り字から、複数の人間の関与を想定し、本編の語注と齟齬する点から、補遺編を編纂した複数の人間が、本編の編纂グループと密に連絡を取らずに、参加したのではないかという仮説を導きだした。また、『日本大文典』のローマ字綴りの中に「みゃ」を表す綴り字がないことから、その背景に日本人の伝統的表記法があることを論じ、そしてロドリゲス自身が書いたと判断される編集方針に対する文章の中の綴り字と、綴り字についての説明とに矛盾があることから、綴り字についての説明には、ロドリゲス自身が関わっていないと推定する。

この章の指摘は重要であり、これまで『日葡辞書』にはロドリゲスは関与していなかったというのが通説であったのであるが、その通説を見直す必要があることを主張する結果となっている。

さらに、『日葡辞書』の本編と補遺編の中で、「みゃく」という音節を表示する語例を分析し、そこに当時の医者に関与していた可能性を論じ、キリシタンに改宗した曲直瀬道三の著作の影響と、曲直瀬道三以前の伝統的医学とが綯い交ぜになって、『日葡辞書』の中に存在していることを論じた。このような当時の医学書との関連などもこれまで注意されていなかったところで、筆者の独創性が発揮されている。

『日葡辞書』や『日本大文典』という、キリシタン資料の中でもとりわけ重要な文献について、これまでとは異なった視点から、大胆に、どのような日本人に関与していたかを論じているという点で、画期的な論文となっている。特に、『日本大文典』の編纂でも『日葡辞書』の編纂でも、複数の日本人の関与を想定し、『日本大文典』の編纂グループが『日葡辞書』の補遺編の編纂に参加していたのではないかという仮説は、これまでの通説に風穴をあけたことになり、注目に値する。

ただ、このように新しい仮説を提出し、通説を否定して行くためには、より確実な資料の提示と周到な論述が必要であるが、根拠となる用例が少ない。これが資料の制約でやむを得ないとしても、傍証となる現象を出来る限り多く指摘する必要がある。また、論の運びには、やや急ぎすぎの嫌いがあり、周到とはいえない部分が見受けられる。これは根拠となる用例の少なさに由来するものであるように見える。これからは、こういう点に留意しつつ、研究を進めてゆく必要がある。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成11年2月25日に調査委員三名が、論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問した結果、合格と認めた。